

専門家のアドバイスを希望する方は、以下の事項を記載しお送りください。

F A X : 03-6811-7206

E-mail : jimukyoku@jsurp.jp

①対象の地区

②まちづくりの内容

③相談したいこと

お名前

連絡先（電話番号・メールアドレス）

日本都市計画家協会は、まちづくりの専門家として、学識者、コンサルタント、自治体など、多様なメンバーにより構成される認定NPO法人です。全国のまちづくりの発展に寄与すべく、震災復興活動やまちづくりセミナー、出前講座など「公益性」の高い活動を展開しています。

活動の一環として、まちづくり相談を実施しています。お気軽に相談ください。

まちづくり相談ホームページ <https://www.jsurp.jp/まちづくり相談/>

E-mail jimukyoku@jsurp.jp



vol.6

まちの拠点 づくり

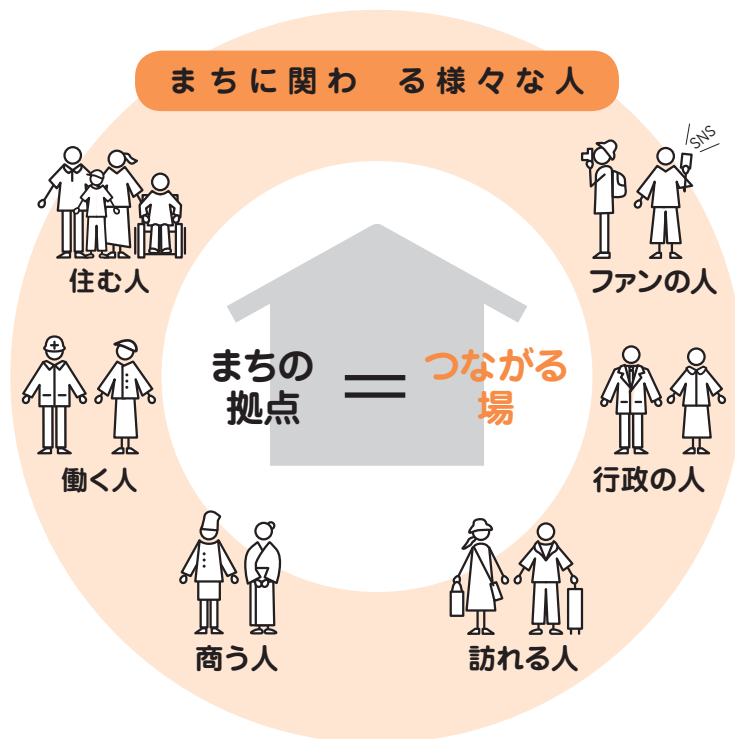


地域主体のまちづくり

地域主体のまちづくりとは、住民や企業、NPOなどが、自分のまちのために自主的に取り組むまちづくりです。

昨今、行政のみならず、自分たちの活動でさらに地域をよくしたいと、まちづくりに取り組む地域が増えていきます。住みやすい環境、地域コミュニティの継続、活気あるまちなど、“高み”を目指しています。

そのようなまちづくりに取り組む方々に活用してもらいたいことを願い「まちづくりNOTE」をつくりました。



「団地」にある拠点



「古民家」を活かした拠点



「空き工場」を改修した拠点



まちの拠点づくり

あなたのまちに、いつも多様な人々が集まっている場所、まちのコミュニティの結節点となっている場所はありませんか？ 人と人のつながりは、社会関係資本とも呼ばれ、近年その社会的価値が見直されています。「まちづくりNOTE」では、まちのなかで人と人のつながりを生みだしている場所を“まちの拠点”と呼称し、まちの拠点づくりを自分たちでも実践してみたいという方々を対象に、取り組みの進め方・ポイントを解説します。

代表的なまちの拠点のタイプと事業主体

建物の用途や業種によって、そこに集まる人々の属性も変わっていきます。まちの拠点づくりを行う主な事業主体も把握しておきましょう。

コミュニティスペース



地域住民が多目的に利用できる交流スペースとして、自治体やNPO団体などが整備しています。

カフェ (飲食・物販)



飲食や会話をしながら、ゆっくりとした時間を過ごせるため、様々な人が交流するのに適しています。

ワーキング (仕事)



色々な業種の人が集まるため、それぞれのスキルを掛け合わせ、まちに新たな活動を生み出すことができます。

ゲストハウス (宿泊)



国内外から旅行者が集まる情緒豊かな場所です。観光をきっかけにその地域との関係を深める若者なども増えています。

事業主体

個人

地域への強い思いを持った個人が、自らの経験・資産を活かして拠点づくりを行っているケースがあります。運営者の個性が強く現れるため、まちに新たな空気が生まれます。

住民組織

町内会や自治会、マンション管理組合、まちづくり協議会などが、自治活動や市民主体のまちづくりの一環として取り組んでいます。住民自身に関わることで、地域に根差した活動を展開できます。

事業者・企業

業種を問わず、本業の一部または延長として、地域に開かれた場づくりをしているケースがあります。事業主の個人的な思いや、企業の地域貢献的な文脈で行われることが少なくありません。

ディベロッパー

都市開発により計画的に整備された市街地では、ディベロッパーが音頭をとり、エリアマネジメントとしてまちの拠点づくりやコミュニティ形成支援を行うことがあります。

地元自治体

自治体が積極的にコーディネートを行っている場合や、市民主体活動への支援策を豊富にそろえている場合などがあります。拠点づくりは、まちの遊休不動産の活用方法の一つとも言えます。



さあ、まちづくりをはじめよう!

まちの拠点づくりには、ハードとしての“空間づくり”と、その場所を運営していくための“しくみづくり”双方の視点が不可欠です。

コンセプト・事業スキームを考えよう

ステップ

1

つくりたい拠点のイメージを膨らませましょう。自分たちが何をやりたいのか、どのような人に来てもらいたいのかを考えます。収支計算など、事業スキームも同時に想定しておくことが大切です。既にまちの拠点を運営している人に話を聞いたり、実際に使ってみたりするのもよいでしょう。

時間をかけて物件を探そう

ステップ

2

拠点とするのに条件の良い物件を見つけるのは大変ですが、根気よく探していると、ある日突然出会うものです。その地域に詳しい人やWEBなどからたくさん情報を得ましょう。拠点は、「都市開発などに合わせて新築する」、「自分たちが管理する建物を一部開放する」といったつくり方もあります。

使い方に合わせて建物を改修しよう

ステップ

3

建物のデザインはとても大切です。実際の活動や、利用する人々の顔を思い浮かべながら、空間づくりをしましょう。詳細な設計や内装は、建築家などの専門家に相談できます。それでも、自分たちができる作業はみんなでDIYすると、建物への愛着も湧いてきます。

多様な人が集まる拠点を運営しよう

ステップ

4

建物が完成したらいよいよ拠点のオープンです。素敵なコミュニティが育まれることを願って、楽しみながら運営しましょう。誰でも気軽に参加できるようなイベント・交流会を定期的開催すると、だんだんと活動に共感してくれる仲間も増えていきます。ウェブサイトやSNSでの情報発信も大切です。

織物産地にある古民家をまちの拠点に

“桑都”という美称を持つ八王子市は、古くから養蚕や織物が盛んなまちでした。しかし、ものづくり産業全体で、生産の高速化・コスト削減が求められる中、生産拠点が地方や海外へ移っていき、織物のまちとしての姿は失われつつあります。

そうした中、八王子市中野上町で4代続く奥田染工場を中心に、ものづくりへの熱い想いをを持った仲間たちが立ち上がり、同地域にあるかつて織物工場を営んでいた古民家を改修して生まれたのが「つくるのいえ」です。この場所は、主にイベント・ギャラリースペースとして運営されており、ものづくりに出会い、つながることができる様々な活動が行われています。ある日は、地域で働く人・住む人

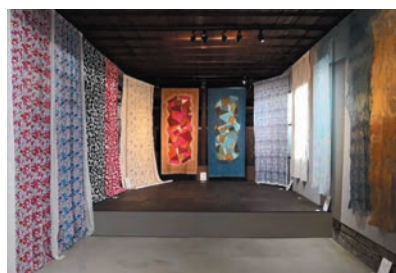


「つくるのいえ」での集合写真

が集まるごはん会が企画されたり、またある日は、職人とテキスタイルを学ぶ学生のコラボ作品展示会が開催されていたり、訪れるといつも新しい感性に触れることができます。また、ウェブサイトを通じて、全国の織物産地の情報や、八王子織物の歴史、工場への取材レポートなどを公開し、情報発信拠点としての機能も担っています。



地域内外から人々が集まるごはん会



職人と学生のコラボ作品の展示会

市民参加でつくるエリアマネジメント拠点



自分たちで行った改修作業



完成した「鹿島田DAYS」の外観

「鹿島田DAYS」は、80年代から都市開発が行われてきた川崎市・鹿島田駅周辺で活動するエリアマネジメント組織の拠点として、地元住民、商店主、周辺企業、ディベロッパー、行政、大学など、多様な関係者が連携して運営する施設です。“地域とつながる”をテーマに、コワーキングカフェとして営業しています。鹿島田DAYSでは、物事を進めるプロセスを“市民参加”で実施することを大事にしています。例えば、建物を改修する時には、全体のデザインはプロの建築家をお願いしつつも、ペンキ塗りや家具製作などは、地元の住民や子どもたちと一緒に運営者の手で行いました。また、エリマネ

のサポーター会員を募っており(2021年3月時点で20名程度)、それぞれがやりたいこと、できることを定期的に出し合い、独自性のある企画を生み出しています。開発により新しくできたまちでは、新旧住民の交流が課題となることがありますが、エリマネ活動を共に行うことは、そういった課題の解決にもつながります。



建物外からでも見える店内での交流の様子

人々の交流を生む空間づくり

前述した「鹿島田 DAYS」を改修する際に心がけた、人々の交流を生む空間づくりのポイントを紹介します。



活動を支える バックヤード

イスやテーブル、テントなどまちづくり活動で使用する備品の収納場所を予め確保しておく便利です。



視線を集める スクリーン

プレゼン企画やメンバー同士の打ち合わせなど、大きなスクリーンは、多用途に利用できます。



スタッフと 気軽に話せる席

拠点を構えていると、地域の人々がふらっと立ち寄ってくれます。スタッフと気軽に話せる席があると理想的です。



みんなで囲める机

みんなで囲める机があると、交流イベントやワークショップなどの際に、参加者同士の会話が弾みます

ちょっとした軒先空間

屋内と屋外をつなぐ軒先空間は、様々なコミュニケーション、アクティビティを生み出す場所になり得ます。



地域で愛される場所を育てる

まちの拠点を地域で愛される場所に育てていくためには、
運営者たち自身がその地域と深く関わること、
その場をつくり上げる過程をみんなで共有することが大切です。

地域を知る

地域で活動している団体や、まちの歴史、成り立ちなどをよくリサーチしましょう。地域の情報をたくさん知ることによって、その場所ならではの個性を持った拠点づくりが可能になります。リサーチを通して、新たなコンテンツや協力者が見つかることがあります。

現場を体験する

その地域の特性に合った拠点づくりが、日本全国あちこちで実践されています。実際に足を運んで、どのような想いを持った人たちが活動しているのか、どのような体制で運営しているのかなどを直接体験してみましょう。

みんなでビジョンをつくる

まちの拠点の使いかたを考えるワークショップを開催するなどして、目指すべきビジョンをみんなで共有しましょう。出来上がったビジョンは、言葉や絵などで表現して、見える化しておくことで、多くの人の共感を得やすくなります。

関わりしるを用意する

拠点の運営を続けていくと、活動に関わる人の顔ぶれが固定化してしまうことがあります。例えば、ただただみんなで集まってご飯を食べる会や、外からの持ち込みイベントを受け入れるなど、日頃から初めて訪れる人の関わりしるを用意しておくことでよいでしょう。

こまめな情報発信

ウェブサイトやSNSなどを活用してこまめに情報発信をしましょう。些細なことでも、日々更新を続けることで、自分たちの活動のファンになってくれる人が出てきます。地域に根差した活動をしていくには、回覧板や自治会の掲示板などを活用することも重要です。

Q & A

Q1 なにから始めたらいいですか？

A いきなり拠点を構えて運営していくのは大変です。まずは、まちづくりイベントへの出店や、一時的に場所を借りて場づくりを試みるなど、期間を限定して試験的に活動するのがよいでしょう。

Q2 事業の立ち上げ方は誰に相談できますか？

A 自治体や金融機関などが創業支援を行っていることが多いです。個別相談会や勉強会などに参加してみることをおすすめします。近年では、クラウドファンディングで開業資金を集める、新しい創業のしかたもあります。

Q3 空き物件が見つからない時はどうすればいいですか？

A 空き家・空き店舗対策の観点から、自治体が空き物件の情報をまとめているケースがあるので、まずは相談してみましょう。また、地元で古くからまちづくり活動をしている人に話をしてみるのもよいですね。

Q4 たくさんのメンバーで情報をやりとりするには？

A プロジェクトごとにSNSのグループを立ち上げたり、クラウドでファイル共有を行ったりすると円滑なやりとりができます。メンバー全員が現場に集まらない時は、オンラインミーティングを開催するのも有効です。

発行：認定NPO法人日本都市計画家協会
企画：三谷繭子 内山征
編集：介川亜紀
デザイン：mio

イラスト：山川才綾
執筆：山本大地

※当冊子は令和2年度官民連携まちなか再生推進事業の補助金を活用して作成したものです。